

有機技術通信

トピックス

- のど元過ぎれば食糧不足
- 第2回有機農業総合研究大会を開催
- 第4回公開セミナーのご案内

www.ofrc.net

特定非営利活動法人
有機農業技術会議 事務局
発行責任者：藤田 正雄

のど元過ぎれば食糧不足

中国で生産された輸入加工食品が物議をかもしだしても、しばらく時日が経過すると、まるでどこ吹く風の様相を呈してしまうのが我が国民性なのだろうか。「のど元過ぎれば熱さを忘れる」のたとえ通り、相当な騒動になったとしても、しばらくすると騒動があったことさえ忘れてしまうようだ。この国民性がどこから来たのか、昔、不思議でならなかった。その後、この疑問が氷解したのは石垣島へ調査に赴いた時のことだった。

石垣島を正面から襲来した大型台風は、最大風速50メートルを超え、宿泊していたホテル全体がビリビリと震えるような凄さだった。数百メートル離れた岸壁にもものすごい波がどすうんとぶつかった瞬間に波頭の塊が風に吹きちぎられて、次の瞬間にそのままホテルの窓を直撃し、ザバッとぶつかってくる。一夜荒れ狂った風がピタッと止んだ数時間は空が晴れ、これが台風の見かと思うや否や、襲来時の風よりものすごい吹き返しが轟々と荒れ狂う。結局キャンセル待ちを含め5日間も余計に閉じ込められたが、まさに台風一過に出会う人々の顔が、なんと晴れやかだったことか。

西村 和雄（有機農業技術会議代表）

長い説明になったが、それが重大事件でも関係者以外は、ほとんどすぐに忘却の彼方へと過ぎ去ってしまうという、一過性の出来事なのだと思います。知らされた石垣島であった。

古い話になるが、1973年の石油ショックも、ものすごくあった。しかしながら、とてつもない速さで石油消費を減らし、省エネ生活をやってのけた国民性も称賛に値する。当時、わたしは結婚一年目、乳飲み子を抱えた妻とボロアパートで過ごした寒い冬を忘れはしない。トイレトペーパーがたちまち底をつき、小麦粉さえも行列をつくって買い出しに行った光景を、いまだに思い浮かべる。

だが、今度は様相が異なる。天ぷらに使う小麦粉の不足なんぞ、たかが知れている。70万ヘクタールに及ぶ耕作放棄地と不耕地を抱えたままで、食糧はおろか海外に唯々々と依存している合成化学薬剤や化学肥料、そしてリン、マグネシウムなどの資源が、どこかの国で輸出をストップすれば、たちまち底をつく。

それらが我が国へと来なくなったとき、はたして農薬と化学肥料に依存しつくして、マニュアルを頼り

第4回 公開セミナー

有機農業を基本から考える

今回は、福島県農業総合センターを会場に、有機農業実証圃見学会、情報交流会、および研究会を企画しました。有機農業を正しく理解していただくために、農業者のみならず、国および地方自治体の有機農業技術に係わる研究者・普及員・行政関係者、JA関係者などにもご参加いただき、有機農業について率直に話し合い、学べる場となれば幸いです。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

開催日 2008年7月3日（木）-4日（金）
場所 福島県農業総合センター多目的ホール（福島県郡山市）
参加費 1,000円（含資料代）、会員無料

第1日目 13:00～17:00

実証圃場見学（福島県農業総合センター試験圃場）

情報交流会「有機農業の理解を深めよう」

有機農業の定義（西村和雄）農地ささえる土の生き物（藤田正雄）わが国の食料自給の可能性-キューバの有機農業を例に（吉田太郎）情報交流

詳細やにつきましてはwww.ofrc.netをご覧ください。内容が決まり次第順次更新していきます。

第2日目 9:15～15:00

セミナーⅠ「堆肥・土づくり」

土作りの基礎（橋本力男）事例報告（実施農家）

交流会

セミナーⅡ「有機農業の実際」

事例報告（実施農家・2題）

に、作物を見ることさえしなくなった農業者が、あるいは営農指導員が、いったいどうして作物栽培が続けられるというのだろうか。先日も、筆者の住む京都府の小都市で、資金を申請して有機栽培で・・・といったところ、いまだに営農指導員や市の営農課（という呼称かどうか行政に暗い私は知らないが）から首をかしげた疑問の声が続出したという。昨年も、京都府北部の小さな市で、若い二人が有機農業で就農したいかと相談を持ちかけたところ、午後いっぱい懇々と『有機農業がいかに拙劣か。できっこないか。農薬・化学肥料なしでどうするんだ』などと、言われ続けたという。「でも昨年（話は去年だから）暮に有機農業推進法が通ったのをごぞんじなのでしょ？」と、たまりかねた若いカップルが言うと、「そんなの知らんなあ。何かあれば京都府から言ってくるからねえ」と、シャアシャア答えたという。

こうした傲岸不遜な例は枚挙にいとまない。この形容詞が失礼だとは思わない。なぜなら、いまだき新規に就農しようという殊勝な若者を前にして、ありがたく思えばこそ、無碍に断るのは何もわかっていない。傲岸不遜が悪ければ無知蒙昧というべきか、眼前に迫りつつある事態をどのように回避できる手立てを、あ

るいは果たして対応策を策定しているのだろうか。

土は一夜にして肥沃にはならない。世に言う土作りとは言っても、それを具体的に、しかも短期間で的確に普通作が可能ないように土を管理できる方は、はなはだ寒い話だが、そうざらには居られそうにない。

さて、資源が乏しくとも持続可能な農業生産を可能にするのは、有機農業や自然農法でしかないのだと、ここで声を大にして叫びたいところだが、昨年すうっとトライはしたものの関係者の反応は絶望的なほど鈍かった。ま、日本各地には、まともに正面から有機農業に取り組もうとしている行政も、無きにしも非ずなので、ひとまず熱心な姿勢を向けていただいている地方には当方としても真摯に対応したい。

が、傲岸不遜・無知蒙昧な方々には、残念ながらお相手をするには差し控えよう。先ほどあげた例でもおわかりのように、私は心底腹を立てている。それはさておき、我々は生産農家を直接の対象として、ボトムアップを志している。隗より始めよ。との言葉は、それができた国から離れたところで、これから本当の実を結ぼうとして、今、呱呱の産声を上げたのだと私は思っている。

第2回有機農業技術総合研究大会を開催

3月21日、「第3回農を変えたい！全国集会in北海道」（主催：変えたい！全国運動、農を変えたい！全国集会in北海道実行委員会、司催：酪農学園大学、後援：NHK札幌放送局、江別市、コープさっぽろ農業賞実行委員会、生活クラブ生活協同組合、全国農業協同組合中央会、北海道、北海道新聞）の一環として、第2回有機農業技術総合研究大会を酪農学園大学にて開催した。有機農業実施者、農業改良普及センターおよび農業試験場職員、JA職員、流通関係者、消費者など約500名が集った。そのうち、約9割が北海道内からの参加であった。

来賓あいさつを農林水産省農林水産技術会議事務局松本万里課長補佐、北海道有機農業研究協議会木村宏会長、全国有機農業推進協議会本野一郎副理事長よりいただいた。

西村和雄代表の基調講演「有機農業再考論」では、「有機農業とは、農薬や化学肥料の代替品を使う農業ではなく、農地の生態系を生かした農業である」と有機農業のとらえ方を正した。シンポジウム「大規模有機農業の可能性を探る」では、木嶋利男座長と4名の報告を受けて、有機農業における雑草・病害虫対策、育種、人材の育成などについて、会場からの質問を交えながら活発な討議が行われた。

このなかで有機農業実施者からは、公的機関の職員に対して、試験研究成果をポジティブに評価してもらいたいこと、有機農業をやりたいと相談された方に、“無理”“だめ”と言わずに、一緒になって考え育ててほしいとの要望が出された。



シンポジウム風景

その後、稲作、畑作、畜産、堆肥・土づくりの分科会に分かれて、座長などの話題提供のあと参加者とともに意見交換を行った。

研究大会の詳細は当日の資料集『有機農業技術確立のためにⅢ』（1冊1000円で頒布中）を参照されたい。

研究大会の詳細は当日の資料集『有機農業技術確立のためにⅢ』（1冊1000円で頒布中）を参照されたい。

有機農業技術会議事務局

〒390-1401 長野県東筑摩郡波田町5632

（財）自然農法国際研究開発センター

農業試験場内

FAX:0263-92-6808 E-mail: office@ofrc.net